10周年特別賞
10th Anniversary Special Award

菊池 里子（きくち さとこ） Satoko Kikuchi
医療法人社団仁明会齋藤病院 看護部長
Director of Nursing, Iryouhojin Shadan Jinmeikai Saito Hospital
推薦者 冨田 きよ子 東北福祉大学 准教授

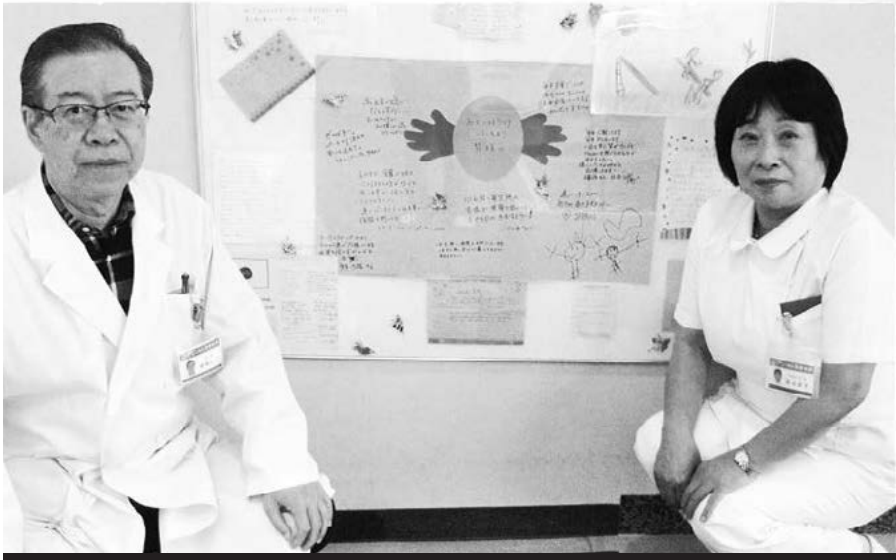
宮城県出身。中学3年生の時、担任から「これからは女性も手に職を」と看護の道を勧められ、看護師を目指すことを決意。父親からの後押しもあり、宮城県高等看護学校に入学。1974年同校を卒業後、東北公済病院へ就職。1976年より国立千葉病院で勤務。その後、結婚・出産により休職するが、子育てが一段落した後、看護師に復帰。民間病院にて、師長、部長代行を経験後、夫の仕事関係で、新潟県を経て、宮城県に転居。1993年より同県の石巻市にある齋藤病院に就職。翌年から同病院で看護部長を務める。

災害医療と心のケア

東日本大震災で民間病院と患者さんを守り抜くために

宮城県出身の菊池里子氏が、幾つかの病院を経て再び宮城県に戻り、同県にある齋藤病院に就職したのは、1993年。すでに師長、部長代理の経験があった菊池氏は、翌年に同病院の看護部長に就任した。そんな菊池氏がいつものように看護部長として勤務中の2011年3月11日に東日本大震災が発生。この時、菊池氏は看護部長としてのリーダーシップを発揮し、冷静な対処で同病院の機能とその患者さんを懸命に守り続けた。

震災直後、まず菊池氏が行ったのは入院患者の不安対処であった。理事長や院長が不在の中、各部署へ安全点検を的確に指示。入院患者の状況と被害報告を受け、病院内の状況を把握した。そして、菊池氏は全病棟を廻り患者さんと直接話すことで、患者さんの不安を取り除くことに努めた。その後、災害対策本部が置かれ、院内の非常用品の確認および入院患者の詳細状況を把握するため一覧表を作成。そして、齋藤病院は震災日の夜を迎えた。



■支援メッセージの前で齋藤仁一理事長と

翌日、病院は津波による浸水はなかったが、約150m先まで津波が押し寄せ周囲は水没してしまい、災害用の無線機が繋がらなかったことにより外部との連絡が取れない完全な孤立状態となっていた。自家発電機があったため、電気の供給が途絶えることはなかったが、発電機が作動しない病棟もあり、患者さんの移動など、さまざまな対処に追われた。また、いつ新しい物資が到着するかも分からない状況をふまえて、院内にあった物資を有効活用するために、今後のルールを定め、物資を無駄使いしないことを心掛けながら患者さんへの医療提供を続けた。さらに、非難してきた付近住民にも可能な限りの処置を施した。新たな物資が届き始めるまで、毎日2回、緊急対策本部にてミーティングを行い、医療を継続するためのさまざまな審議がなされ、菊池氏を含む職員の多くが震災の被災者ではあったが、過酷な状況の中、全員が必死に尽力していた。

震災から約1週間が経過し、ようやく支援物資と共に少しずつ医療物資も到着するようになると、新潟県中越地震を経験した他院の看護部長より災害時における職員たちの心のケアの重要性についてアドバイスを受けていた菊池氏は、大切な家族や家を失いながらも必死に看護に取り組む職員一人ひとりと面談をし、心の内を聴くことで職員たちのケアにも努めた。

「この震災のために看護師になったわけではない。でも看護の仕事を選んだのだから、やれるだけのことをやろう」という思いを職員たちに伝えると同時に「でも頑張りすぎないでね」という配慮を心掛けたと語る菊池氏。甚大な被害を及ぼした震災の中、医療を継続するために看護部長としての責務を果たした菊池氏の判断力、行動力が孤立した民間病院と患者さんを救ったと言っても過言ではないだろう。

■共に尽力した師長たちと一緒に